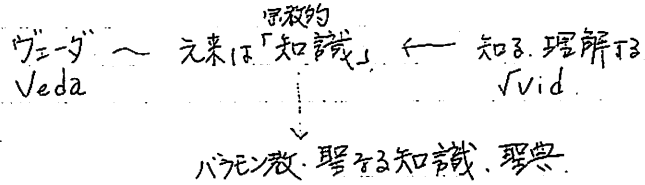


### 古代インドに於ける音韻学の位置

辻直四郎 ウェーダとウパニシャト 創元社 1928.6 (全集所収)

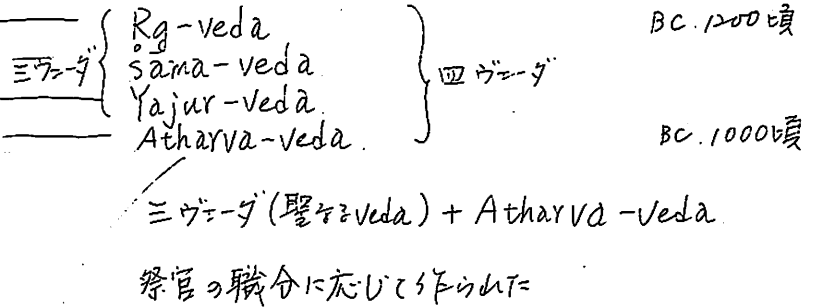
「インド文明の曙 岩波文庫 1967.1  
年代関係の故、やや互しあり。



Rg ← rc 讚嘆の詞 sāma ← saman 旋律の詞

Yajur ← yajus 祭詞

讚 <sup>イウ</sup> hotr 祭官が唱へる 神々に祭りの場に奉り請し 讚誦を行(讚歌の行) —  
 歌 <sup>エンガ</sup> udgātṛ 祭官が唱へる 歌吟(の行) —  
 詞 achvarya 行祭の施(祭詞の實際を行) —  
 詞 Atharvāṅgirasah Atharvan と Angirās 檀族が行ふ —  
 吉祥増益呪法詞  
 先祖誦伏の詞



馬の腹に刻まれた神々の歌へて行 Rg-veda.

インドアリアンが Gangaへ進出して後のこと。土俗信仰 Atharva-Veda  
から判度されて記されている

→ 後、brahman 祭官の位置を獲得する。(土俗信仰が地俗信仰)

祭詞全体の總監する地位に上った。

○7C 仙教は仙教 <sup>ヒンズー教</sup> と吸収される 滅亡  
(同化)

神秘的な呪文に尊重する外に、<sup>イタラ</sup> 之外の真言。比較的短い  
(イタラ = 長)

1. <sup>サンヒター</sup> samhitā 本集 (or 連声)  
中心部分。

サンヒターとはヒンズー教の語と統一している。  
hotr, adhvaryu, brahman が = 中心部分。  
udgātā (歌詠) (技術的) である。  
= 中心には含まれない。

2. brāhmana 本集に付随する説明的部分。 祭儀書  
(マニヤ)

< 儀軌 祭の内容、手順を規定して (詳細の説明)  
釈義 本集の意味を解説し、祭りの起源の明かす  
(= 比喩的) 可

Yajur-Veda の一つ。是 Yajur-Veda は本集と祭儀書が  
一緒になっている。(他の Veda は分けて別れている)

3. Āraṇyaka 森林書

修業の階 =  
森林で修行する人々の教書の書。BC. 8頃  
思弁的宗教になる

4. Upaniṣad 奥儀書

BC. 5頃或は 仙教が興った時代と同様に  
哲学全盛時代

天地一元の原理 ~ 獲 brahman 我 atman } → 獲我一如と云

3. 1. 2. の中に含まれている場合がある。

070. 仙教は 印度教 ヒンズー教へと吸収される 滅亡  
(同化)

神秘的な呪文と尊厳を有する。 2つ〜真言。 比較的短い (短く) "長"

1. <sup>サンヒター</sup> samhitā 本集 (or 連声)  
中心部

サンヒターはヒンズー教の中心部として統一している。 notr, adhvaryu, brahmanが中心部。 udgātā (歌詠)は行政的の中心部である。 中心部は含まれない。

2. brāhmaṇa 本集には随伴する説明的の中心部。 祭儀書  
(中心部)

< 儀軌 祭儀の内容、手順を規定している (祭儀の説明)  
祭義 本集の意味を解説し、祭りの起源を明らかにしている (中心部の説明) >

Yajur-Vedaの一つ。 是 Yajur-Vedaでは本集と祭儀書が一緒になっている。(他のVedaは分けて別れている)

3. Āraṇyaka 森林書

祭儀の終りに 森林で修行する人々の教義の書。 BC. 8頃 是が終りに記されている

3.4. は 2の中は含まれている場合が多い。

4. Upaniṣad 奥儀書

BC. 5頃 印度教が興る時代と同じ頃 哲學全盛時代

天地一元の原理 ~ 我 brahman 我 atman } → 我我一致の原理

マハトマガンジー

↑ mahā-ātman. 我

(omy <sup>独</sup> atmen <sup>和</sup> 我)

区別する

R

ksātrya が Upaniṣad の時代 E おもて  
個人が尊厳される ~ 世

Upaniṣad. ~ Vedānta の時代

↳ Veda + anta.

意味は 尻尾, エンゴ

↓

「Veda の極致」の義と見做された。

Veda 聖典

天啓文学 (śruti) <sup>シルシ</sup>  
(文部)

— 聖仙 (ṛṣi) が神秘的靈感による感得 (啓示) による (神が作られた)

Vedāṅga · Mahābhārata (叙事詩) · Rāmāyana · Manu-smṛti (マヌの法典)

○ 聖法文学 (smṛti)

聖賢が叙述した (人間が作られた)

マヌの法典

Mānava-dharma-sāstra  
マヌの 法 經學書

マヌ - 原人 (愛man)  
最初の人間

Vedāṅga - Veda-āṅga

- 手足 / 胴体 (注: 付教は胴体 - 中心とされる)

バラタ支令

① Śikṣā (Prātisākhya)

音聲學 - 應用音聲學 (注: 注が古くは 6.5.2.1.3)

Vedāṅga 支

(六つの神聖學)

2. Kalpa-sūtra 祭儀經 (家庭で行う火の祭り)

短文と集めた

③ Vyākaraṇa 文法學

(Veda の補助學; 後一箇の學問とされた)

- ④ Nirukta 語源学
- ⑤ Chandas 韻律学
- 6. (Jyotis) Jyotisa 天文学

- Vedānga

1. 3. 4. 5. が言語に關しては 終

の事實は

○ インドに於いて言語 (口頭言語) が如何に尊重されて  
 いたる物語っている。